

新約聖書 ヨハネによる福音書 10章 22節—30節 (新共同訳)

²² そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。²³ イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。²⁴ すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」²⁵ イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。²⁶ しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。²⁷ わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。²⁸ わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。²⁹ わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。³⁰ わたしと父とは一つである。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「羊は聞く」

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 にこうあります。「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」(II コリ 12:9-10)。

「力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」。「わたしは弱いときにこそ強いからです」。

これらの聖書の言葉からは、精神科医であるヴィクトール・フランクルが提唱した「態度価値」が思い起こされます。態度価値とは、人間が運命を受け止める「態度」によって実現される価値です。どのような惨めで苦しい状況の中にあっても、ヤケを起こさず、いかに希望と光の方向に向かう態度を取れるかということです。

フランクルは、第二次世界大戦中のアウシュビッツ収容所という極限の状況の中にあっても、人間らしさを失わず、夕日を見て感動したり、人を思いやって助けたり、尊厳のある態度を取り続けた人々がいたことを目の当たりにしました。フランクルは、人間がどのような状況下でも最後まで実現しうる価値として、この態度価値を最も重視しています。

病や貧困、その他様々な苦痛の中で、活動の自由や楽しみを奪われたとしても、その運命を受け止める態度を決める「自由」が人間には残されている。どんな状況下でも、自分の置かれた環境でいかにふるまうかという、人間としての最後の自由だけは何ものにも奪うことはできない。まさにこれこそが人間の尊厳

だとフランクは私たちに伝えます。

フランクはこう述べます。「あなたがどれほど人生に絶望したとしても、人生があなたに絶望することは決してないのです」。

またフランクは、こうも言います。「たとえあなたが人生に何も期待していても、人生の方はあなたにまだ期待しているはずです」。

さて、本日の福音書には、エルサレムの神殿奉献祭という祭りで、ソロモンの回廊にて行われた、イエスとユダヤ人たちの論議が記されています。ここでのユダヤ人とは、ファリサイ派と呼ばれる、ユダヤ教の宗教指導者たちを表しています。

「神殿奉献記念祭」は、口語訳聖書では「宮きよめの祭り」と訳されています。「宮きよめ」とは、神聖な場所を清めることです。この祭りのことが本日の福音書の冒頭で記されるのは、イエスと宗教指導者たちとの対峙が、根本的な「宮きよめ」であることを暗示しています。

彼らは、イエスを「取り囲んで」言います。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」（ヨハネ 10:24）。「取り囲んで」という表現には、彼らのイエスへの威圧が表わされています。

イエスの生涯は、多くの論敵に取り囲まれてなされた福音伝道の歩みでした。ヨハネ福音書では、イエスが福音を語った後、頻繁にそれについての論争が起こったと記されています。

「もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」と彼らはイエスに詰め寄ります（ヨハネ 10:24）。イエスの存在によって心をかき乱され、苛立っていた彼らは、イエスの正体を暴き、なんとかイエスを早く片付けなければならないという気持ちでいっぱいでした。イエスがその質問に「そうだ、わたしはメシアだ」とはっきりと答えたとしても、彼らは決してメシアだとは認めなかったでしょう。

「しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」とイエスは言います（ヨハネ 10:26-27）。

キリストを信じるとは、イエス・キリストの言葉、声に対して、開かれた耳をもって聞き従うことです。フランス出身の神学者ジャン・カルヴァンはこう言いました。「信仰とは、目を閉じて、耳を開くことである」。

イエスが登場するより前の時代の旧約聖書において、神は、姿や形ではなくて声である、と伝統的に伝えられてきました。神の姿は見えないし、また見てはいけない。神を見るのではなく、神の言葉、神の声を聞くことが大切なのです。

神からの呼びかけの声は、大音量の声ではありません。旧約聖書では、預言者エリヤに対する神の呼び声は、「火の後（のち）に、静かにささやく声」（列王記上 19:12）として聞こえてきたことが記されています。この静かな、ささやくような声を聞き分ける耳が、私たちには必要なのです。

ここでイエスが語ったように、イエスとイエスを信じる者との関係は、羊飼いと羊の関係のごとくであり、さらに羊飼いは羊を導き守るのみでなく、羊に命を与えます。イエスはこう言います。「わたしは彼らに永遠の命を与える」（ヨハネ 10:28）。

イエスは命の源泉であり、羊飼いであるイエスの命が羊に与えられます。命を与える者がメシア、すなわちキリストであり、イエスを信じるとは、イエスが永遠の命を与える者であることを信じることです。

信じるとは、何かを観念的に思い込むことではなく、その関係の中に入ることを意味します。イエスを信じるとは、イエス・キリストと相互に関わり交わる関係性の中で、その恵みの中に自分がすでにいることに気がつくこと、神とのつながりに生きることなのです。

では、永遠の命とは何でしょうか。永遠の命とは、肉体の死を迎えた後のことだけではありません。この地上に生きながらにして、羊飼いである主イエス・キリストとつながることによって、永遠の命を私たちは得ることができるのです。

先ほど述べたとおり、旧約聖書において、神は、姿や形ではなくて声であると伝統的に伝えられてきました。神の姿は見えないし、また見てはいけません。神を見た者は死ぬと考えられていました。

逆に言うとそれは、私たちは死ぬ時、神の姿をはっきり見ることができるということなのかもしれません。

ヴィクトール・フランクルはこう言います。「祝福しなさいその運命を。信じなさいその意味を」。

神の姿をはっきりと見ることができるその時まで、私たちはこの地上で、神の声に耳を澄ませながら、まことを持って、希望と喜びのうちに生きていきましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。あなたが私たちに与えてくださる人生において、あなたから呼びかけてこられる、静かにささやく声に従う耳を開いてください。私たちが、自分自身をあなたに明け渡し、あなたの道を歩んでいくことができますように。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

新約聖書 使徒言行録 9章 36節—43節（新共同訳）

³⁶ ャッフアにタビタ——訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」——と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた。³⁷ところが、そのころ病気になって死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。³⁸リダはヤッフアに近かったので、弟子たちはペトロがリダにいと聞いて、二人の人を送り、「急いでわたしたちのところへ来てください」と頼んだ。³⁹ペトロはそこをたって、その二人と一緒に出かけた。人々はペトロが到着すると、階上の部屋に案内した。やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた。⁴⁰ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。⁴¹ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。⁴²このことはヤッフア中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。⁴³ペトロはしばらくの間、ヤッフアで皮なめし職人のシモンという人の家に滞在した。

新約聖書 ヨハネの黙示録 7章 9節—17節（新共同訳）

⁹この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、¹⁰大声でこう叫んだ。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、／小羊とのものである。」¹¹また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、¹²こう言った。「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、／誉れ、力、威力が、／世々限りなくわたしたちの神にありますように、／アーメン。」¹³すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」¹⁴そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。¹⁵それゆえ、彼らは神の玉座の前において、／昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、／この者たちの上に幕屋を張る。¹⁶彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、／太陽も、どのような暑さも、／彼らを襲うことはない。¹⁷玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、／命の水の泉へ導き、／神が彼らの目から涙をことごとく／ぬぐわれるからである。」

教会讃美歌 292番「重荷をにないて」、375番「神の息よ」、199番「主よいま去りゆく」。